

アイヌの愛藏せる漆器に就て

吉 野 富 雄

一 概 要

アイヌがその住居に我邦の床ノ間の如き神座を設けて平常此所に、
行居、唐櫃、櫛、手洗の類を安置し、熊送の儀式に之を用ゆる事は
一般に知れ渡つたことではあるが、其中に江戸初期から桃山或は室
町時代にも遡る蒔繪の優品が存在するとは思ひも掛けぬ問題であつ
た。この事實が東京に紹介せられて骨董界に新分野が展開されたに
ついては、吾人も一應之れが實狀を知る可く、昨年七月中三週間に
互る視察旅行を企て稍々其概要に通ずる事を得た。全道に於けるア
イヌの總數は約一萬七千人と云はれ、其の分布は膽振、日高、十勝、
釧路等北海道の南國に沿ふて密に、北部と渡島、後志には粗である。
就中日高は彼等の本據にして人口七千を算へ、その沙流郡は最も集
團せる地方である。

さて北海道に於てアイヌの風俗を最も簡單に見られる所は、旭川
郊外の近文部落と、室蘭附近の白老部落で、兩所共寶物類を觀覽に

供する家が數軒あるが、近文部落は土人の思想生活が向上して、酋
長川上カネトの經營するアイヌ文化陳列所を初め、陳列式になつて
風俗を知る爲には甚だ物足りない。之れに反して白老部落は戸數も
八十に餘り、家屋の構造も猶舊態を存する者あり、酋長熊坂の家な
ど、神座もそのまゝに各種の行器、櫛、鹽、飾太刀、陣羽織等内地
渡來の寶物も豊かに、や、往昔の生活を彷彿せしむる者がある。し
かも一步を進むで其保存せる器物の種々相を知らんとすれば、猶、
古風を存する日高アイヌの根據地を訪はねばならぬ。汽車苫小牧よ
り分れて日高線に移り佐瑠太驛に至れば、沙流川に沿ふて、紋別、
新平賀、紫雲古津、平取、二風谷、ペナコリ等の部落連なり、平取
までは輕便鐵道の便があり、其先も自働車を通ずる事が出来る。吾
等は此邊を二三日間調べて思ひも掛けぬ種々の資料を知る事が出来
た。其後北見の美幌、釧路の糸魚澤、十勝の帶廣等の各部落を歴訪
したが、日高地方に比すれば得る所は甚だ尠い。しかし此の外アイ
ヌの居住地は諸所に散在し、樺太にまで及んで居るから、如何なる

所に如何なる逸品を存するかは未知數の事に屬する。

二 漆器入島の經路

アイヌの所藏した漆器の量は非常に多かつたが、或は洪水に流さ

れ、近時又連年

の不作に禍され、

又思想の變化に

伴つて賣却され

た物が頗る多い。

是等の中には特

にアイヌ向に造

られた輸出品も

あるが、本格の

高等漆器が其實

非常に多いので

あつた。其等が

如何にして入手

されたかは甚だ

興味を惹く問題であるが結局、

一、昔時内地の移住者が携帯せる物。

アイヌの愛藏せる漆器に就て

第 一 圖

二、アイヌ懷柔の爲當路者より贈品とせる者。

三、産物と交換せる者。

の凡そ三類と見做す事が出來やう。彼等は元來漁獵民族で、物資豊富の土地に住みながら、殆んど原始人の如く生活が低く通貨さへ持たなかつたから、富を蓄積する術を知らなかつた。併し乍ら美觀は解して居て、是を得る事は最大の樂みであり、唯一の財産であり、且つ無上の權威でもあつた。夫れが爲めには殆んど命懸でも働き、何物をも惜まず、他部落との戦争の如きも目的は是が爭奪にあつたと云はれる。しかも漆器が最も珍重せられた所因は、日本の漆器が美觀を極めて世界的に愛好せられ國號を以て呼ばれたのと同様であらう。アイヌの古老が漆器の鑑識に於て一隻眼を有する事は吾人の親しく實見した處で、古き上作は如何に汚れて居ても必ず其價值を知つて居た。故に今日の彼等にして經濟力に餘裕さへあらば決して手放すものではあるまい。其入手の方法に就き二三の例を挙げると、一、北海道拓殖館に陳列せる一行器の解説に、「徳川時代の製品にして大名の使用せしものなり」と云ふ。日高新平賀アイヌが熊皮五枚と交換せしものなり」又今一ツの付符には、「多くは和人が交易の爲作りたるものなれども稀に和人の使用せし素質の良きものありアイヌは之れを寶物にす」と。

二、近文部落視察の際朱塗の根來杓壹個を持ち來りて買取を乞ふ婦人があつた。夫れは彼女の若き日にアッシ一枚と交換したものと云ふ。アッシ一枚は現今の價格にて十二三圓である。

三、帶廣郊外に九十許の老婆が居て江戸初期の見事な耳盥二個を持つて居る。それは今より七十年前一個は十圓、一個は十五圓で求めたものだと言ふ。當時として高價なものであらう。

猶かくの如く非常に多數の上等品が如何にして入島せるかは、大體貿易の具としてあらう。江戸時代三百年間、大平相繼ぎ蒔繪の如き奢侈品が盛んに造られたが、譬へ大名大家と雖代々の調度を永久に保存し切れる者ではない。財政其他の都合もあつて拂出された物のあるのは必然で、是等を古物とし

て内地に安賣するよりは、交易の具に供した方が莫大の利益を得た事は勿論であらう。往時代々の古物はかくして入島した者と思はれる。その次は明治の維新である。その變革に因つて出藏した者も相

圖 二 第

當入島して居ると思はれる。

三 漆器の種類と用途

アイヌに渡つた漆器の種類は非常に多く、時代的には室町に上る者あり、上中下各等の品質、蒔繪、螺鈿、漆畫、沈金等の種別あり。根來塗の膳椀、飯器、片口から、淨法寺製の器物、近代輪島塗の沈金等もある。特に珍らしきは古き唐物の存する事である。夫れ等をアイヌは如何に使用せしか。

一、シントコ

旭川アイヌ文化陳列所の付札に「常に寶物を入れて神座に供へ置き熊送りの時式場へ陳列する貴重なる寶物なり」と書かれてある。其物には、行器、貝桶、唐櫃、長持、鎧櫃、大食籠の類があり、彼等は其形や、模様や、形式に因つてそれ／＼名稱を付けて居る。(1)クト・シントコ、帶のあるシントコ、即ち行器、鬘桶かつらおけの類。(2)カバルベ・シントコ、薄手の意にて貝桶なり。(3)ケマウ・シントコ、足のある。(4)ボロ・シントコ、角切形？(5)イセボ・シントコ、兎の模様ある。等々である。

二、バツチ (鉢の義)

同き付札に「儀式の陳列品として用ゆ、重要な寶物なり」とあり。(1)キラウ・バツチ、角盥。(2)トコムシ・バツチ、耳盥。

三、エトヌツプ、エチウシ (柄鉢子の轉)

同き付札に「常に寶物として神座に飾り置き熊送りの際式場に陳列し酒を入れる寶物なり」と、椶及片口の類を稱す。

四、ツキ（杯）

内地の椀なり。必ず盃臺あり、酒を盛りて神に供へ自らも呑む。

五、マツチオ・シオツプ、主婦の箱と譯す。すまひか角赤手箱なり。

その他蒔繪の大盃、蒔繪の馬杓、湯桶、漆畫の大樽などもあつた。

以下寫真について簡單なる解説を加へる。

四 圖版解説

挿圖第一は、白老會長熊坂シビツ

タルの家寶で、下段に見ゆるは

漆塗の桶と曲物で、多くは漆畫

が大まかに描かれ、酒を蓄ふる

器であるが、これらはアイヌ向

きに造られたものである。その上に載せたるは行器、貝桶、耳盥

等で皆金蒔繪の施された上等の漆器である。又天井から釣られた

飾大刀の中には我國の古式になる兵庫鎖の者があり、精巧優麗な

る彫飾が加へられて居る。此圖は熊坂家寶物の一部分で、實際は

尙多量に陳列されて居る。

挿圖第二は、旭川近郊近文アイヌ川上コサヌの寶物で、菊蒔繪行器

アイヌの愛藏せる漆器に就て

一對、巴に風車紋行器一隻、窠紋散鐵線花蒔繪行器一對、松竹鶴
龜蒔繪貝桶一隻、枝垂櫻蒔繪角盥（頗優秀）、鐵線花蝶蒔繪食籠、
松竹蒔繪耳盥、流に水草蒔繪耳盥、吉野椀、等があり數は少いが
質は中々よかつた。

挿圖第三は、昨年八月、白木屋に開かれた北方文化展覽會に於ける
漆器の陳列状態で、江戸初期頃の優品が十點許り揃つて居た。

貝に藻蒔繪角盥。（圖版第六）

胴徑一尺二寸五分 口徑一尺五分
高五寸

第 三 圖

挽物造り黒漆の盥で、二雙の手が
著しく離れて付てゐる。扁圓にし
て典雅なる美形をなし、貝と藻の
文様が蒔かれて居る。金銀の平蒔
繪に梨地繪を交へ、且つ蛤と海扇
との斑文には金薄を用ひた蟲喰塗
が出来て居る。さればその作風は

鎌倉妙本寺の杯、都久夫須麻神社の床框に類する桃山前期の優作
であらう。本品は昨年春樺太アイヌから出た者と云はれる。

櫻に紋散蒔繪角盥。（圖版第十ノ二）

口徑一尺三寸一分、總長一尺九寸八分、高七寸

頗る大形の盥で外周の一半に梨地の電雲いなづまぐもを蒔き、其上に舞鶴、鐵
線、梅鉢等の丸紋を散らし、他の一半は黒地として櫻の圖を描く。

櫻は金蒔と梨地繪より成り、金蒔に針刻を施すなど桃山蒔繪の特徴を現はして居る。本品は日高國沙流郡紫雲古津付鍋澤コブアンヌ(昨年八十五歳)媼舊藏の品、妍爛、北海道隨一の蒔繪と稱せられた。

秋草蒔繪耳盥。(圖版第十ノ四)

口徑八寸七分 總長一尺一寸二分 高四寸四分

耳盥の遺品は室町時代から存するが、其例は未だ甚少い。蓋し本品の如く扁圓形にして、肩に稜なく、耳に金物無きは古制であらう。本品は黒漆にして前後兩側に秋草の蒔繪を施し、優麗暢達の筆致に金蒔と梨地繪を配したもので桃山時代の制作と見られる。北海道室蘭附近アイヌの舊藏であつた。

鶴丸蒔繪耳盥。(圖版第十一ノ三)

口徑五寸九分 高三寸六分

小形の耳盥で肩に少しく稜を認められるが、木製金地の耳で尙古制を存する者である。黒漆にして、前後兩側と内部に鶴の丸を大繪に蒔く。圖は平時に梨地繪を交へた妍爛の作で筆法正しく江戸初期に屬する者であらう。本品は帶廣市外音更アイヌの舊藏であつた。

電蒔繪盥。(圖版第九ノ二)

昔大名道具に使はれた塗盥で徑二尺以上の大器である。外周には金蒔と梨地を以て電形を蒔き、四方向ひ合に丸に二枚鷹羽と、名の知れぬ丸紋とが蒔かれ、内底には流れに水草の蒔繪がある。本品は日高國沙流郡紫雲古津付鍋澤爲雄氏の舊藏であつた。

松梅蒔繪椀。(圖版第十一ノ四)

椀はんは古來手洗と組んで灌漑用の一具をなして居た。即ち水差しの器である。もと其口が眞直に胴の半に穿入せしが故に「半挿」の稱起れりと云ふ。本品は挽物造り黒漆金物付の上等品で、兩側面に盤屈した松と梅の圖を蒔いたものである。金蒔に梨地繪を交へ筆致頗る勁健に描かれ、江戸初期の特色を現はして居る。

鶴龜蒔繪湯桶。(圖版第九ノ一)

黒漆に銀の蒔繪を以て波に鶴龜の文様を描く、筆致優麗にして江戸時代初期の繪風を現せるもの。

淨法寺塗椀及杯臺。(圖版第九ノ二)

赤青黃の三色漆繪にて種々の草花を描き、細線石疊式の雲と、切箔の方形文様を配することは、所謂淨法寺塗の常套手段である。其鄙びて妍麗なる雅味は數寄者の愛好する所であるが、かゝる雅品もアイヌ間に尊重されて居るとは意外の事であつた。

菊桐紋散蒔繪椀。(圖版第十ノ三)

金蒔に針刻を加へ、梨地繪を交へた菊桐の紋散であるが、その妍爛にして悠暢なる筆致は、正に桃山時代の作品と覺しきものである。本品も帶廣市外音更アイヌの舊藏であつた。

車前草漆畫椀。(圖版第十一ノ二)

内朱、外黒漆の椀。外側に朱漆もて車前草を描く。取題の奇抜なるのみならず、圖様亦奔放にして針刻、蟲喰等を加へ、桃山蒔繪の遺風を傳ふるもの。蓋し東北に於ける製作であらう。

沈金食籠。(圖版第十一ノ二)

直徑八寸四分 高五寸八分

八角切子形の板物造りで黒漆を加へ、蓋表の八角板面には唐人物、八方の梯形板面には鳳凰、八方側面には牡丹唐草、脚には蔓形の沈金を施す。刀法適勁ながら既に細太自由の彫法成り、時代も江戸中期に入らんとする者の如くである。併し乍ら、沈金の技は支那の法を傳へて既に室町時代に制作せられた事は分明であるが、その盛んになれるは江戸末期の事に屬し、其間の状態は全く不明であつて、かゝる資料の一品でも加つた事は學界の幸福と云はねばならぬ。

松藤蒔繪行器。(圖版第十一ノ二)

豎横六寸五分 高七寸六分 足張八寸五分

方形大隅切の筥で周圍に十數段の凸帶を施し、四脚を附す。蓋甲の四隅、脚の上下には金銅唐草彫の金具を附し、蓋甲と四周には松と藤の蒔繪を施し、所々に巴紋を配せり。研出と平蒔より成り、金溜と梨地交錯の美を極めたもの。蓋し江戸初期の制作にかゝる物であらう。特に側面凹凸間に於ける燠煤の狀、雅味一段ながら、思ふにアイヌの舊藏たりしを前年早く移入されたものであらう。小器なれど行器の一例としてここに掲げた次第である。

五 アイヌ間に於ける漆器の保存状態

アイヌの愛藏せる漆器に就て

北海道は寒地なるが故に彼等の小屋は暖房と炊事の焚火で、燠煤甚しく、且つ氣候の爲か煤がタール化して、梁や天井はコールターで塗装した様な状態であるから、従つて室内陳列の漆器類も煤げ方が内地の比ではなく、且内地に於ては是等の器物は皆外箱に納められ、且禮式作法に依つて取扱はるべきを、彼等は尊重するとは云へ作法を知らざるが故に、高等品の堅牢に任せて亂暴なる取扱ひを爲し、損傷を生じたものが非常に多い。現に吾々の目撃した所では、行器中には多く椀、篋、片口、椀等の小器をそのまゝに押込み、蒔繪の食籠には粉などを入れ、角盥には蕎麥、小豆などがあり、大盥にては溫鈍粉を捏ねた形跡などがあつた。尤も大名の調度であつた本塗蒔繪の盥などは、これを剥けてもかまはず實用に使つたなら、三代四代は平氣であらう。それを今日内地人が三圓や五圓で買はうと云ふ事は、亞鉛製の金盥に比しても格段な間隔がある。而して彼等はかくの如く粗末に使用する場合もあるが、父祖の愛用し、或る神事に用ひし如き由緒ある者に對しては非常なる愛着を持つのであつた。而して彼等の間には漆を扱ふの技なく、漆繪の髹塗なども皆内地へ送つて塗らせたものであるから、漆器の破損は小破片と雖も失ふ事なく、小孔を穿ち馬の尾毛を以て補綴し、その漆繕ひに成る者は、内地人の旅工の手に依つた者である。さてアイヌの漆器は煤げた爲に味ふべき古色の現れた者もあるが、多くは不汚にしてそのまゝ、内地人の鑑賞に供する事は出来ない。因つて道具商は之れを石鹼と絲瓜を以て清掃するを常とする。併し乍ら本來在る可き所に傳

はり、彼の茶器の如く代々數寄者の袱紗に磨き上げられた者と對比する時は、その品格性に於て到底日を同うして語る事は出来ない。玆に所謂名物の價值が存する所因で、太閤や利久所持の傳説や、二重三重の外箱が決して徒爾ではなく、品物に對して歷代愛藏者の氣魄の影響する事が確められる。

又アイヌ傳來の漆器は最近初めて將來されたものではなく、その高級なる者の以前よりポツ／＼移入されて居た事は、今となれば幾つと思ひ當る節があるのである。

六 結 語

以上述べ來つた如くアイヌの藏する漆器類は決して下等品ではない。實に内地の文化を誇る最高の工藝品が過半數を占め、殊に吾々の驚いたのは老婆一人住の畑中掘立小屋に、燦爛たる蒔繪のシントコ三四對を列べ、その上に唐草蒔繪の角盃、電雲に櫻蒔繪の耳盃、藤蒔繪耳盃、椀、椀等の飾られて居た事である。勿論由緒ある家系だとは聞いたが、行器の二三對を持たぬ家は無かつたらしい。

現今學術の進歩につれて北海道に於ても、博物館陳列所等の設置は決して少しとしない。吾々の見た内でも北海道拓殖館。東北大學博物館。函館民族館。網走土族館等があるが、是等の内地美術品に對して理解を示したものは一つもなく、その質も量も貧弱を極め、皆アイヌ風俗の一部として侮辱的に陳列されて居るに過ぎない。思

ふに故郷を離れて數百里、風土の異なる新開の殖民地に於て最も寂漠を感じる者は祖先の遺した文化であらう。殊に初等教育に於ては、其教材の不足に最も困難を感じる筈である。而るに是等の館に於ては先住民族の遺物など、凡そ國史や國粹文化には何等關係なき土石器類の蒐集にのみ浮身をやつし、教育者間に於ては自が祖先の使用品をすら全く知らざる情態である。適々北海道に於てはアイヌに因て此等古器の保存された事は甚だ幸と云はねばならぬ。恐らく内地の一縣を漁り盡してもアイヌ一戸の所藏に及ぶ家は果して幾軒あらう。最近アイヌ傳來の角盃が内地に將來せられ一個數百圓を以て賣買されて居る。歷代道當局に於て聊、美術上に關心があつたなら、是を巧く運用した丈けでも、國史と美術の教育に資し、且つ一般道民の美術鑑賞欲を充足させたのみでなく、土人保護の經濟問題としても役立た事であらう。況や其他服飾品、刀劍飾等の優品をも多數傳ふるに於てをや。此際道當局の覺醒を促すと共に、實際問題としての古美術教育が全國的にも益々等閑に付すべからざるを痛感する次第である。

(一) 鶴龜蒔繪湯桶・淨法寺塗碗及杯臺

(二) 電蒔繪皿

(一) 沈金食籠

(二) 櫻に紋散蒔繪角皿

(三) 菊桐紋散蒔繪椀

(四) 秋草蒔繪耳皿

(一) 車前草漆畫碗

(二) 松藤蒔繪行器

(三) 鶴丸蒔繪耳盞

(四) 松梅蒔繪椀